Ⅲ　学習指導の基本

学習指導では，基礎的な知識・技能を習得させるとともに，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力等を育み，主体的に学習に取り組む態度を養うことが大切です。そのためには，体験的・問題解決的な学習の充実を図り，児童生徒の興味・関心を生かして自ら問題解決ができるような学習指導を進める必要があります。

1　学習指導を進める際の教師の心構え

・教えることを通して，自らも学ぶという姿勢で取り組む。
・常に新たな気持ちと発想で授業に臨む。
・児童生徒の気持ちに寄り添い，一人一人の児童生徒理解に基づいた指導を行う。

2　学習指導に対する教師の意識

☆子ども観
・一人一人が多様なよさや可能性をもった存在である。
・自分なりの思いや願いをもった主体的な存在である。

☆指導観
・児童生徒の側に立ち，よさや可能性を引き出し，伸ばす。
・児童生徒が主体的に学ぶことができる学習活動を授業に位置づける。

☆評価観
・児童生徒のよさや可能性を共感的にとらえる。
・自己実現を支援し，指導と評価の一体化を図る。

学習指導における４つの要素

目標

目標は，学習内容の決定や児童生徒の学習活動の構想の際，重要な役割を果たします。具体的で明確な目標の設定が第一条件です。

教師は，設定した目標の実現を目指して教材研究を行い，学習過程や発問，板書などの指導方法を工夫します。特に児童生徒が問題解決に主体的取り組めるよう適切な動機付けが重要です。

児童生徒は，教師の指導のもと，自ら考え，主体的に判断し，表現することのできる体験的な学習や問題解決的な学習を通して，知識や技能を身に付け，思考力や判断力表現力を高めます。

教材は，学習指導の目標を実現させるために指導内容と児童生徒の学習内容を結びつけるものです。教師は，目標や児童生徒の実態に即して教材を分析し，学習活動を展開します。

教師　⇔　児童生徒　⇔　教材

（参考文献：学校教育の手引き　新しい先生のために）

習熟度別学習に関する研究

学校に求められていること

基礎学力の確実な定着

習熟度別学習

個々の理解の状況や習熟の程度に応じた指導

期待される学習効果

児童生徒
わかる喜び
できた感動

教師
授業力向上
授業改善

劣等感や差別感を生じないように…

メンバーは固定せず，適宜入れ替えを…

児童・生徒

①わからないときに先生がゆっくり教えてくれる機会が増える。
②もっとやってみたいことを自分のペースで進めることができる。
③同じような考え方の仲間と協力して学習を進めることができる。

教　師

①１単位クラスの人数が少ない人数になる。
②一人一人の子どもへの関わり合いの時間が増える。
③より一層きめの細かい指導と評価が可能になる。
④ほぼ等質の子どもの集団のため，指導がしやすい。

保 護 者

①子どもの理解や技能の習熟の程度に応じて，わかるまで丁寧な指導を受ける機会が増える。
②担任以外の多くの教師と関わりが増え，より一層社会性や豊かな人間関係づくりの観点からプラスになる。

個に応じた指導の推進計画作成のポイント

学校全体で組織的に取り組むことが不可欠

指導の意義の理解
・年度当初に，研究推進委員会や校内研修で指導の意義や趣旨について共通理解を図る。

推進計画の作成
・先行研究や実践校の情報を収集し，計画の改善や進行管理，資料の蓄積，整理，保管を図る。

指導評価計画の作成
・集団の編成や指導体制，実施単元の目標や内容，評価の計画を準備し,実施後は修正を加える。

時間割の編成
・児童の実態や指導内容を考慮し指導計画と相前後して早い時期に時間割を編成する。

研修の推進
・指導方法や指導上の配慮事項について共通理解を図り，各学年での授業研究を実施する。

学習環境の整備
・習熟度別学習を行う教室（机，椅子）や教材教具の整備，学習資料の作成等，順次整備する。

児童生徒への説明
・習熟度に応じた授業で差別感や劣等感をもたせないグルーピングや学習ルールを理解させる。

保護者・地域への説明
・授業参観やアンケート等を実施し，趣旨やねらい，効果や進め方について理解を求める。

☆基礎学力の確実な定着を目指して行われている習熟度別学習（個々の理解の状況や習熟の程度に応じた指導）に関して，以下のページに各校の実践事例を掲載いたしましたので，是非ご活用ください。

名寄小学校の習熟度別学習

【実践１】
＜学校改善プランに基づく取組＞

これまでも指導方法工夫改善加配教員を活用したＴＴと習熟度別少人数指導を行ってきた。学校改善プランに基づき，算数科で全学年，習熟の程度に応じて学習集団を編成し，習熟度別少人数指導を実施している。

習熟度別少人数指導は，単元終了時に２時間程度行い，担当教師団が指導内容や学習集団の編成・教材などについて協議し，基礎基本を確実に習得させる工夫をしている。

【実践２】
＜重点単元による習熟度別指導＞

習熟度別少人数指導の実施に当たっては，毎年行っているＴＫ式の学力検査と全国学力・学習状況調査の結果を参考に，課題の見られる領域を重点として全学年の実施予定一覧表を作成し，計画的に実施している。

また，校内の教育課程検討委員会で，指導内容の系統性が強い単元や，前年度習熟の程度に個人差が大きかった単元について指導法の検討がされるため，習熟度別少人数指導の必要性があると判断された単元は重点として指導している。

【実践３】
＜学習集団の編成の工夫＞

学習集団の編成に当たっては，単元終了時に行った「たしかめミニテスト」の結果を参考に，児童が自分に合った学習内容のコースを選択している。

コースの名称は，児童が劣等感や優越感を感じないよう，学習内容に応じた名称や，意欲的に学習できるような名称にするなどの工夫をしている。また，学習内容に応じた名称にすることで，習熟度別少人数指導の学習時間でどのような力をつけたいか，児童が目標を明確にできるようにしている。

【成果と課題】

習熟度別少人数指導の学習後に行っている「たしかめミニテスト」と同内容の「ふりかえりテスト」では，どの単元においても正答率が上がり，理解が深まっていることがうかがわれる。児童の感想から，「発展問題があって楽しかった。もっとたくさん挑戦してみたい。」「分からないところが減ってうれしかった。すぐ間違いを直すことができてよかった。」「コース学習をやると，きらいなところも得意になった。」など，習熟度別少人数指導開始時に目標としていたことが，終了時にはできるようになったことを実感していることがわかる。

一方，「やっぱり難しかった。」「もう少し教えてほしかった。」など，苦手な部分を克服しきれない児童もいたということも事実である。今後の習熟度別少人数指導の進め方や指導の仕方をさらに工夫することで，どの児童も達成感をもてるものにしていくことが課題である。

豊西小学校の習熟度別学習

【実践１】
＜学校教育目標の具現化を目指す取組＞

学校教育目標
「夢をもち　たくましく　かしこく」

【知】「進んで学び　行動する子」から
↓
◎学ぶ意欲を育て、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着
↓
○ＴＴによる個別指導の充実
○ニーズ等に応じた支援の工夫
↓
☆習熟度別による少人数指導

本校の学校教育目標である『夢をもち　たくましく　かしこく』を受け，学習指導においては，重点の一つとして，「個のニーズに応じた指導や見取りの工夫と適切な支援」が挙げている。これまでも加配教員を活用してＴＴ指導を実施していたが，それまでの学力検査を分析すると，①全体的に算数を苦手としている。②低位の児童が多い。という傾向が見られたため，平成２２年度３学期より習熟度に応じた指導を算数科において実施している。

ねらいとしては，①学習内容を確実に身につけさせるために，指導方法や指導体制を工夫し，個に応じた指導のさらなる充実を図る。②習熟の程度に応じた指導をすることにより，学習意欲を高め，一人一人の能力を効果的に伸ばすことを目指す。知識や技能を伸ばすことはもちろんだが，子ども一人一人の意欲を高めることを重点としている。

【実践２】
＜重点単元による習熟度別指導＞

習熟度別指導の実施にあたっては，当初，練習問題が中心となる単元中間や終末でのまとめの場面で行っていた。しかし，基礎基本の定着という観点と本校児童の実態から，特に計算領域の単元については重点単元と位置付け，単元を通して習熟度別指導を行っている。その他にも，担任の意向を踏まえ，習熟度別指導を行う単元を決定し，計画的に実施している。

【実践３】
＜学習集団の編成の工夫＞

学習集団の編成に当たっては，原則的に児童の希望を優先とする。迷っている児童については，担任が助言を行う。編成するにあたって最も大事にしていることは，児童に劣等感や優越感を生じさせないことである。そのため，習熟度別学習の意義を児童に分かりやすく説明するだけでなく，参観日や文書等で保護者にも周知し，理解を得られるようにしている。また，各コースの名称を工夫するなどの配慮も行っている。(＊じっくり，のびのび，チャレンジコース)

基本的には２つのグループで行うが，学習内容によっては細分化して３つのグループで行ったり，じっくりグループを２人の教師で指導したりする方策をとっている。

【成果と課題】

○年度末に行った児童アンケートによると，「学習しやすい」「発表ができるようになった」など，非常に肯定的な意見が多かった。少人数の中で発表に対する自信をつけ，全体の中でも発表できるようになった児童も多く見られた。

○学力検査等の結果を見ると，低位の子の割合に減少が見られた。また，「自分のペースや力に応じて学習に取り組むことができて良い」という児童の感想が多く，意欲の向上にもつながっている。

●現在は児童の希望でグループ分けを行っているが，児童が自分の実態に合っていないグループを選択する場合もあったので，グループ分けの方法を一層工夫する必要がある。

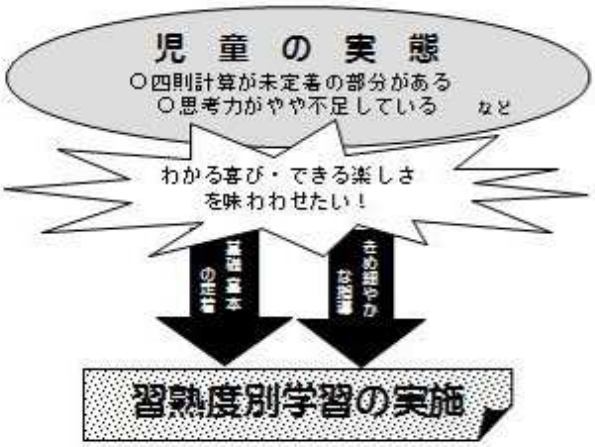
●グループによっては，多様な考えが生まれにくい状況を生じる場合があったので，発問や教材教具等の工夫を図る必要がある。

風連中央小学校の習熟度別学習

【実践１】
＜児童の実態に基づく取組＞

これまでも加配教員を活用した TT を実施し，個に応じた指導の充実を図ってきたが，全国学力・学習状況調査や NRT 学力診断から，「四則計算の一部未定着」「思考力の不足」などの実態が明らかになった。

そこで，児童がわかる喜びやできる楽しさを感じることができるよう，よりきめ細やかな指導を通して，基礎的・基本的な学習内容の確実な定着を図ることをねらいとし，理解や習熟の程度に応じた集団（グループ）による，習熟度別学習を実施している。



【実践２】
＜重点単元による習熟度別学習＞

四則計算（「数と計算」領域）を中心に，学年間の系統性が強い単元や学習内容の理解や定着に個人差が生じやすいと考えられる単元を，「重点単元」として教育課程に位置付け，個に応じた指導の充実を図るようにしている。

指導を行う際は，担当者と担任で事前に学習のねらいを明確にした指導計画を立てて計画的に進めている。

各学年における重点単元

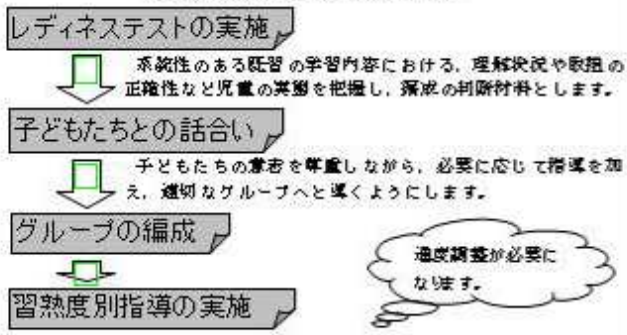
1年	○いくつといくつ　○たしさん　○ひきさん
2年	○時こくと時間　○たし算　○ひき算　○たし算とひき算 ○かけ算　○かけ算九九づくり
3年	○わり算　○あまりのあるわり算　○□を使った式と図　○分数 ○小数　○かけ算の筆算(2)
4年	○わり算の筆算(1)(2)　○小数のしくみとたし算，ひき算 ○小数と整数のかけ算，わり算　○分数の大きさとたし算，ひき算
5年	○小数のかけ算　○小数のわり算　○単位量あたりの大きさ ○割合　○分数と整数のかけ算，わり算
6年	○分数のかけ算　○分数のわり算　○速さ　○比 ○小数と分数の計算のまとめ　○6年間の総復習

【実践３】
＜学習グループ編成の工夫＞

児童に劣等感を抱かせることなく，なおかつ学習意欲を高めることが大切と考えている。そのために，レディネステストから得られた具体的な判断材料をもとに，児童の意志も尊重しながら，グループ編成を行っている。

また，意欲を持続させるため，グループも固定化せずに，理解状況などによって，他のグループへ変更もできるようにしている。そのため，できる限りグループごとに進度に差が生じないように進度調整を行っている。

基本的な集団編成の流れ



【成果と課題】

○理解状況などが同程度の少人数集団であるため，一斉指導を効率よく行うことができた。
○児童が理解できない部分をそのままにせず，指導者に遠慮なく伝えられる環境を整えることにより，学習への意欲が高ってきた。
○児童個々の学習状況を的確に把握しながら指導することにより，基礎的・基本的な学習内容の定着を図ることができた。
●グループ編成で教師側の思いと児童の考えにずれが生じることがあり，さらに効果を高めるために，適切なグループへと導くための方法を検討する必要がある。
●きめ細やかな指導ができる反面，定着のためにグループ間で進度に差が生じる場合もあり，より綿密に打合せを行う必要がある。

名寄中学校の習熟度別学習

【実践１】
＜学校改善プランに基づく取組＞

個に応じた指導を充実させるため，学校改善プランに基づき，習熟の程度に応じて学習集団（少人数）を編成し，習熟度別学習を実施している。

【実践２】
＜重点単元による習熟度別指導＞

習熟度別指導の実施に当たっては，特に，指導内容の系統性が強い単元や習熟の程度に個人差が生じやすい単元を重点単元として取り組んでいる。

【実践３】
＜学習集団の編成の工夫＞

学習集団の編成に当たっては，全国学力・学習状況調査やＮＲＴなどを通して生徒の実態を把握するとともに，適時教師からの助言をすることで，生徒自身がコース選択できるように配慮している。

また，本校の教育課題である，「自己の思考や意見を適切に言語化する表現力の不足」を改善するという点からも，小グループにおける学び合い活動を適時取り入れている。

名寄中学校　学校改善プラン（概要）

基礎学力の定着と向上を図るため主体的な学習態度を育てる。そのために個を生かし学ぶ意欲と自己教育力を高めることが重点となる。中期目標として以下の４点。

①学習意欲を高め，基礎的基本的な内容の定着を図り一人一人を生かした主体的な学習活動に努める。

②基本的な学習習慣，望ましい授業態度や学び方を身につけ学力の向上を目指す。

③問題解決的な学習や地域素材を活用した体験的な学習を積極的に取り入れ「自ら学ぶ力」の育成に努める。

④指導計画や指導方法の改善に生きる評価の工夫と適切な学習の評価に努める。

習熟度別学習の活用

単元や学習内容または生徒の実態により，状況に応じて習熟度別学習を取り入れる。

（具体的な取組内容）

◎数学

- 各学年とも「方程式」の単元において発展的学習，補充的学習に分かれた指導。
- 定期テスト前に復習をする際，習熟度別学習を実施。

◎英語

- １年生の英語の導入では，４月に「読むこと，書くこと」の部分で少人数指導を行い，５月以降は習熟度別指導で基礎の定着を図る。

【成果と課題】

現在，数学，英語の２教科で習熟度別学習を行っている。自己の実態に合った学習が行えることで，生徒の学習意欲は高まっている。今後，より充実した習熟度別学習を行うことで，基礎的基本的内容の更なる定着，応用力の向上を目指していきたい。

風連中学校の習熟度別学習

【実践１】＜日常的に用いる習熟度別学習の取組（３コース制）＞

学力差がある集団の中で，**「できる生徒にはさらに上のレベルの問題を提供したい」，「苦手な生徒には最低でも基礎・基本を確実に身につけさせたい」**という教師の願いから，数学科の加配とともに，中学校で「習熟度別学習」という形態を取り入れるようになった。

本紙では，**より一層生徒に「学力をつける」ため**，単元末等で用いられることが多い**習熟度別学習**を，**日常的に行う方法**についての考察を一部まとめた。ただし，**目標の観点は「数学的な技能」に絞っている。**

【実践２】＜習熟度別学習を用いる意義・場面について＞

一斉授業において，「中間層」に合わせた授業を例にとると，

- **上位層は「早く問題を解決し過ぎて手持無沙汰な『時間』」**
- **下位層は「問題の意味がわからない，何を考えていいかわからない『時間』」**

などという**「思考が働いていない『時間』」**が出てくる。その時間を埋めるために，各層へ様々な「手立て」がなされますが，学力差やその差がある人数が多ければ多いほど，各層へ影響が出るのは当然である。（下図参照）。

＊＊＊全員が考えられるようにする」ために，「下位層・上位層への手立て」をしたとき＊＊＊

（下位層等への手立て）
- ○ 早い段階で「全体で見通し」をもたせる
- ○ 図や表，グラフなどを早めに提示する
- ○ ＴＴ配備でさらに支援（問題理解 等）　など

→

（上位層への影響）
- **●「見通し」がかえって達成感の減少につながる。問題解決が早く，時間を余してしまう。思考が一本化され，考え方が狭まる。など**

→

（早く解決した上位層への支援）
- ・「他の考え方でやってみよう！」
- ・「できない生徒へ教えてあげよう！」
- ・「黒板に解いてください！」
- ・「次のページの問題をやってみよう！」　など

→

（全体への影響）
- **・多様な考え方を拾い過ぎてしまい，練習時間が減る。**
- **・下位層へ，十分な自力思考時間を与えられない。**
- **・上位層に進ませると，下位と大きく差が開く。**

など，時間を埋めようとすれば，色々と影響が出る…

このように，学力差が及ぼす授業進行への影響を取り除き，とにかく「有効な『時間』」を増やすという目的に絞り，３人の数学専科で３コース(上中下)に分け，以下の視点で授業を行っている。

考える時間，問題を解く時間を生徒に確保するとともに，「できる」ことを目標にした３コース習熟別学習で，問題解決過程の「自力思考」「集団思考」の時間も短縮し，各コース，多くの(種類の)問題に取り組ませるようにしてみよう。

【実践３】＜日常的な習熟度別学習を実施する際の留意点について＞

① どのコースも「目標」は同じ（ということは，「課題」や「まとめ」も同じ）。
② どのコースも「問題」は変える必要が無く，「問題提示」を変える。
※「問題提示」は文章意味理解から問題解決の見通しまで，生徒の実態に応じて行う。
③ どのコースで使うプリントも，「全て」渡す。（下位層には，配慮が必要）
④ 目標の観点は，「数学的な技能（～ができる）」に絞って行う。

※言語活動や多様な考え方を伝え合う場面を目標の観点とした場合，一斉の方が目的に合う場面が多いです。なので，「生徒に学力をつける」「生徒が点数を取れるようにする」と割り切り，「数学的な技能」に絞ることが大切だと考えます。

「生徒と保護者の立場に立つ」という視点でに行っている。上位層で提示した問題を定期テストに出すわけにはいかない。各コースで「同じことをしている」ということこそ，生徒，保護者への安心感につながると考えている。

【実践４】＜学習集団の編成の工夫と担当教師の連携について＞

各コース，◇どんな目的で　◇どんな進み方で　◇どんなスピードで　やるのかをおおよそ伝えている。また，**分けることで未習が生じないことを約束**している。編成の基本は**生徒の希望**で，あとは**教師の生徒への伝え方次第を工夫**して分けている。

（担当教師の打ち合わせ）習熟度や少人数で3グループにした場合は，「目標」「問題」「どこまで進み」「どのコースをもつ」の4点のみ最低限確認を行っている。